

# ルクセンブルクにおける定住外国人および外国人労働者の増加による3公用語の使用状況の変化と教育上の課題

石 方 未 夢

ルクセンブルクは西ヨーロッパの中心に位置しており、フランス・ドイツ・ベルギーと隣り合っている。人口は60万人程度、面積は2,586km<sup>2</sup>という小規模の国であるが、EUの原加盟国であり、また、金融業の発展により経済的に非常に豊かな国である。フランス語・ドイツ語・ルクセンブルク語の3言語が公用語であり、国民は初等教育の段階からこの3言語を学ぶことになっている。このような言語状況を持つ一方で、近年外国人の人口が増加し、現在は総人口の約半分が外国人である。また隣国から国境を越えて働きにくる労働者も多く、これによりルクセンブルクは言語的・文化的に非常に多様になっている<sup>1)</sup>。

本論文では国勢調査の結果および統計データや資料をもとにルクセンブルクの人口の推移や国内の定住外国人および外国人労働者の増加について明らかにした上で、外国人の増加が言語状況にどのような影響を与えているかについてまとめる。

## 1. ルクセンブルクの言語状況の過去と現在

### 1.1. ルクセンブルクの歴史と言語

現在のルクセンブルクの言語状況や具体的な課題および変化に触れる前に、ルクセンブルクの歴史、特に言語に関する事柄をまとめる<sup>2)</sup>。

「ルクセンブルク」という名が歴史上に登場したのは10世紀後半で、「小さい城塞」を意味する«Castellum Lucilinburhuc»に由来している。西ヨーロッパの中心に位置するルクセンブルクはヨーロッパにおいて地理的に非常に重要な場所にあり、欧州の覇権争いに絶えず巻き込まれていた。1684年から1697年のルイ14世下のフランスによる支配や、1795年のフランス革命軍による統治により、ルクセンブルクでは行政・立法の言語としてフランス語が使用されるようになった。また、1804年にフランス支配下でナポレオン法

典が発布されたことで、司法の分野でもフランス語の使用が認められるようになった。ナポレオン失脚後、1815年のウィーン議定書によりルクセンブルクは「ルクセンブルク大公国」となり、同時に成立したドイツ連邦に加入することになった。1842年にドイツ関税同盟（le Zollverein）に加盟したことにより、特に経済・産業の分野でドイツとの結びつきが強まり、経済界ではドイツ語が好まれるようになった。一方で司法・行政の分野ではフランス語が使用され続け、ルクセンブルク語については、同時期に国内で国民意識が高まり、ルクセンブルク語で書かれた詩や物語が生まれるなど、ルクセンブルク国民のアイデンティティを担う役割を持つようになった。

第二次世界大戦後は欧州経済共同体（CEE : la Communauté économique européenne）をはじめとするヨーロッパの機構や経済共同体への参加により、ルクセンブルクの経済は大きく成長し、ルクセンブルク国内にはヨーロッパ各国から多くの外国人が働きに来るようになった。外国人労働者が増加したことで国内の言語的・文化的な多様化が進み、フランス語・ドイツ語・英語は職場での媒介言語として使用されるようになった。

その後、1984年に言語に関する法律が制定され、この法律によりルクセンブルク語はルクセンブルクの「国語」、フランス語・ドイツ語・ルクセンブルク語はルクセンブルクの「公用語」となり、いずれも司法および行政の言語として認められることになった。

## 1.2. 現在の言語使用状況

ここではルクセンブルクの現在の言語の使用状況についてまとめる<sup>3)</sup>。まず政治について、国民議会ではそれぞれの議員が自由に言語を選択できるようになっており、近年は通常の討論や公開会議の議事録ではフランス語に代わってルクセンブルク語がよく使用されている。その一方で、国会質問における文書のやりとりや法律の起草等では依然としてフランス語が好まれている。行政においても、書き言葉ではフランス語、話し言葉ではルクセンブルク語が使用されることが多いが、1984年の言語に関する法律により市民が行政機関に申請書を提出する際は公用語の3言語を自由に選択することができる。メディアに関しては、雑誌や新聞などの活字メディアで最も使用されるのはドイツ語であるが、外国人向けの日刊紙や週刊誌では読者層に合わせて言語が選択されている。テレビやラジオは、国内の放送局の番組は基本的にルクセンブルク語で放送されているが、視聴者・聴取者層に合わせてルク

センブルク語以外の言語が使用されることもある。職場で使用される言語は分野やサービスの種類によって様々であるが、公用語の3言語と英語が一般的によく使用される言語である。特にフランス語はどの分野においても使用頻度が高く、金融機関や学術研究の分野などでは英語が共通語として使用される一方で、行政や公共交通機関、教育などルクセンブルク人を相手とする分野ではルクセンブルク語がよく使用されている。

### 1. 3. ルクセンブルクの人口の推移

ここではルクセンブルクの人口の推移について、ルクセンブルクの国立の統計所である STATEC (Institut national de la statistique et des études économiques du Grand-Duché de Luxembourg) の統計データと国勢調査<sup>4)</sup>をもとにした報告書を参照してまとめる。

2023年1月1日時点のルクセンブルクの人口は660,809人<sup>5)</sup>で、2022年1月1日時点の人口645,397人から15,412人増加している。これまでのルクセンブルクの人口の変動を見ると<sup>6)</sup>、経済危機による人口の流出や戦争が原因の一時的な人口減少を除き1839年の独立以降ほぼ継続的に増加し、特に1991年の調査以降大幅に増加している。また、20世紀以降の人口の年齢構成の変化を見ると<sup>7)</sup>、20世紀初頭は15歳以下の人口が多く、年齢が上がるにつれ人口が少なくなる、いわゆるピラミッド型の人口構成であったが、20世紀後半になると50歳以上の高齢層が増加し、少子高齢化が進行してきた。しかし20世紀末になると20～40歳の労働年齢の人口が増加し始め、2021年に行われた最新の国勢調査のデータではその傾向がより顕著になった。

## 2. ルクセンブルクの言語使用状況の変化

### 2.1. 外国人人口の増加

前節で述べたように近年ルクセンブルクでは総人口の増加および労働年齢人口の増加が顕著であり、この変化は国内の外国人の増加が理由であると考えられる。ここでは具体的なデータをもとに外国人人口の増加の詳細についてまとめる。

STATEC (2023) によると<sup>8)</sup>、2023年1月1日時点のルクセンブルクの外国人は総人口の47.4%、313,407人であり、全体の半数近くを占める。2022年1月1日から1年間の人口増加数のうち92.2%は国外からの人の流れによる増加であり、1981年以降の外国人人口および外国人割合の推移を見る

と、約40年間で外国人は約3.3倍になり、総人口に対する外国人の割合は20%以上高くなっている。一方でルクセンブルク人自体は1981年の人数から約1.3倍、約8万人の増加であることから、1981年以降の国内の人口増加は外国人人口の増加による影響が非常に大きいことがわかる。

次に国内に住む外国人の国籍を見ると<sup>9)</sup>、最も多いのがポルトガル、次いでフランス、イタリア、ベルギー、ドイツとなっている。EU加盟国が全体の4分の3以上を占めているが、2011年度の調査と比較すると、アジアやアフリカ出身者も大幅に増えており、近年はロシアによるウクライナ侵攻の影響でウクライナからの移民も急増している。また、国内のルクセンブルク人と外国人の年齢の構成を比較すると<sup>10)</sup>、ルクセンブルク人は50～64歳と20～30歳の人口が多く、20歳未満と35～49歳の人口が少なくなっており、65歳以上も年齢が上がるにつれて人数が少なくなるという構成である。一方で外国人は25歳未満、特に20歳前後が非常に少なく、また、60歳を超えると急激に人数が減少するが、労働年齢である25～54歳の人口が極めて多くなっている。このことから外国人がルクセンブルクに移住する大きな目的の1つは職業的なものであることがわかる。

## 2.2. 外国人労働者の存在と労働におけるフランス語使用の拡大

近年ルクセンブルクでは労働年齢の外国人人口が大幅に増加しているが、隣国のフランス・ベルギー・ドイツに住みながら国境を越えてルクセンブルク国内に働きに来る「frontalier」と呼ばれる人々も数多く存在している。2022年の最後の四半期にルクセンブルク国内で働いていた労働者の数は約479,000人であり、そのうちの47%が隣国からの外国人労働者であった<sup>11)</sup>。国内に住む労働者のうちルクセンブルク国籍を持つのは全体の4分の1程度で、このことから国内に住んでいるがルクセンブルク国籍を持たない外国人労働者も多いことがわかる。このような国内に住む労働年齢の外国人および隣国からの外国人労働者の増加により、ルクセンブルク国内の労働の現場は非常に多様な状態になっていると言える。職場で使用される言語について、2018年の労働力調査（l'enquête sur les forces de travail）によると<sup>12)</sup>、職場でよく使用される言語として全体の78%がフランス語、51%が英語、48%がルクセンブルク語を挙げている<sup>13)</sup>。また、ルクセンブルク人が職場で使用する言語として、ルクセンブルク語が87%、フランス語が79%となっている一方で、非ルクセンブルク人（Non-luxembourgeois）が職場で使用するの

はフランス語が76%、英語が56%、ルクセンブルク語については17%と非常に低い数字になっている<sup>14)</sup>。

2011年の国勢調査の職場での使用言語についての調査によると<sup>15)</sup>、2011年の時点では、職場でフランス語を使用する人は全体の68.2%、ルクセンブルク語は60.5%、ドイツ語は34.2%、英語は28.5%であった。先に参照した2018年の労働力調査とは異なる調査であるため直接的に比較することはできないが、2011年と2018年の職場での言語の使用の割合を比べると、フランス語と英語の使用が拡大し、ルクセンブルク語とドイツ語の使用の割合が減少していることが推測される。

### 2.3. ルクセンブルク語の振興政策

国内の外国人人口の増加により、特に職場ではフランス語や英語の使用拡大、およびルクセンブルク語の使用頻度の減少などの言語使用状況に変化が現れている。政府は公用語である3言語やポルトガル語、英語等の言語が1つの社会の中に存在する多様な言語状況をルクセンブルクのアイデンティティの一部であると考える一方で、ルクセンブルク語については唯一の「国語」として特に重要視し、普及促進の立場をとっており、ルクセンブルク語振興のための施策や取り組みが数多く存在している。ここでは2017年3月に発表された「ルクセンブルク語を促進するための戦略」*« Une stratégie pour promouvoir la langue luxembourgeoise »*<sup>16)</sup>を取り上げる。この政策では、振興戦略を実施する上での大きな目標として「ルクセンブルク語の重要性を強化すること」「ルクセンブルク語の標準化・使用・研究を推進すること」「ルクセンブルクの言語と文化の学習を促進すること」「ルクセンブルク語での文化の奨励すること」の4つが設定されており、それぞれの目標を達成するために必要な措置が合計で40項目提示されている。これらの措置・対策によりルクセンブルク国内でルクセンブルク言語および文化を普及させ、その立場を強化すること、そしてそこから欧州・国際社会に対してルクセンブルク語をドイツ語の方言ではない1つの言語として認めてもらうための動きに繋げることを目指している。

2022年12月14日には新たなルクセンブルク語の行動計画<sup>17)</sup>が発表され、ルクセンブルク語の促進・発展・強化のための新たな50の措置が提示された。同日に公開された行動計画の発表に関する記事によると<sup>18)</sup>、2017年の政策で提示された40の措置はそのほとんどが実施され、新たな行動計画は

その内容と成果を受けたものになっており、このことからルクセンブルク語を振興するための動きは着実に発展・拡大していることがわかる。

### 3. 教育上の課題

#### 3.1. ルクセンブルクの学校教育制度と言語教育のカリキュラム

ルクセンブルクの言語に関する教育上の課題について述べるために、まずルクセンブルクの初等および中等教育の制度<sup>19)</sup>と、学校における言語の使用状況と言語の授業のカリキュラムについてまとめる。

ルクセンブルクでは4～16歳までが義務教育とされており、4～11歳の基礎教育 (*l'enseignement fondamental*) と12歳以降の中等教育 (*l'enseignement secondaire*) がある。また、基礎教育の前に3～4歳を対象とした任意の早期教育 (*l'éducation précoce*) がある。基礎教育は4つの課程 (*le cycle*) に分けられており、第1課程は4～5歳、第2課程は6～7歳、第3課程は8～9歳、第4課程は10～11歳の子どもを対象としている。第1課程は就学前教育 (*l'éducation préscolaire*)、第2課程から第4課程は初等教育 (*l'enseignement primaire*) にあたり、第4課程の終わりに生徒の保護者と教師が基礎教育後の進路について話し合い、これまでの学業成績・共通試験 (*les épreuves communes*) の結果・学校の心理カウンセラーが実施する任意のテストの結果をもとに卒業後の進路を決定する。

中等教育について、公立の教育機関のプログラムは主に伝統的中等教育 (*l'enseignement secondaire classique*) と一般的中等教育 (*l'enseignement secondaire général*) の2つがある。伝統的中等教育は原則7年間で、高等教育 (*les études supérieures*) や大学教育のための準備としての教育が行われる。4年目の終わりから専門分野に分かれ、その後は選択した分野を中心に学ぶことになる。一般的中等教育も7年間で、卒業後は社会に出て働くか、大学もしくは大学以外の高等教育機関に進学することになる。生徒は3年目の終わりに専門分野に進むか、職業訓練 (*la formation professionnelle*)<sup>20)</sup> に進むかを選択する。

次に学校における言語使用と言語教育について確認する。まず基礎教育の第1課程 (就学前教育) ではルクセンブルク語の会話の指導が行われるが、このルクセンブルク語学習は特にルクセンブルク語を母語としない子どもにとって、日常的にドイツ語が使用される第2課程以降の学習への橋渡しとなる。第2課程から第4課程ではフランス語を除くすべての授業においてドイツ語が指導言語となっている。ドイツ語の学習は第2課程から始まるが、フ

ランス語の学習は第2課程の途中からフランス語の会話の指導が始まり、読み書きについては第3課程から始まる。第3課程では1週間あたり総授業数28コマのうちルクセンブルク語が1コマ、ドイツ語とフランス語が12コマであり、半数近くが言語の授業ということになる<sup>21)</sup>。

中等教育について<sup>22)</sup>、伝統的中等教育では、最初の3年間は初等教育に引き続き媒介言語としてドイツ語が使用されるが、それ以降はドイツ語と英語の授業を除く全ての授業でフランス語が使用されるようになる。1年目の言語の授業はフランス語とドイツ語のみであるが、2年目からは英語とラテン語と一部の学校では中国語を選択することができるようになり、3年目からは全員が英語の授業を受けることになる。4年目以降は専門として選択した分野ごとに異なるものの、基本的にはフランス語・ドイツ語・英語の授業があり、分野によってはイタリア語やスペイン語などの授業がある場合もある。一般的中等教育では、伝統的中等教育とは異なり、基本的にはドイツ語が媒介言語として使用され続ける。1年目はフランス語とドイツ語の授業のみだが、2年目から英語の授業も受けることになる。4年目以降は選択した専門分野によって細かいカリキュラムは異なるものの、伝統的中等教育と同様に基本的にはドイツ語・英語・フランス語の3言語の授業がある。中等教育では1週間あたり約30コマのうち、10コマ前後が言語の授業になっている。

### 3.2. 国内の児童・生徒数および外国人児童・生徒の割合

ルクセンブルク国内の児童・生徒数および外国人児童・生徒の割合をまとめる<sup>23)</sup>。昨年度、2021/2022年にルクセンブルクで基礎教育を受けていた生徒の数は合計で60,494人であり、10年前の2012/2013年から9,000人程度増加している。以下、公立・私立含め、国が指定するプログラムを受けている生徒54,237人<sup>24)</sup>の詳細を確認する。国籍ごとの人数を見るとルクセンブルク国籍を持つ生徒は全体の55.3%、それ以外の外国籍を持つ生徒は44.7%である<sup>25)</sup>。外国人生徒の国籍で最も多いのはポルトガルで16.0%、次いでフランスが6.1%である。2012/2013年以降外国籍を持つ生徒数は減少しているものの、ルクセンブルク人生徒のうち20.3%は他の国籍も持っており、その人数も合わせると半数以上が外国籍を所持していることになる。生徒の第一言語 (la première langue parlée)<sup>26)</sup>に関しては、ルクセンブルク語を第一言語とする生徒が全体の32.5%、その他の言語を第一言語とする生徒が67.5%である。第一言語をルクセンブルク語とする生徒の99.1%がルクセンブル

ク人生徒であるが、ルクセンブルク人生徒のうち 40% 以上はルクセンブルク語以外を第一言語としている。生徒が第一言語とするルクセンブルク以外の言語の中で最も多い言語はポルトガル語でその割合は 23.5%、次いでフランス語が 13.6%、アラビア語・英語・イタリア語・スペイン語・ドイツ語はそれぞれ 2～3% 前後である。

中等教育については、2021/2022 年の伝統的中等教育の生徒数は 15,294 人で、ルクセンブルク人生徒は全体の 69.1%、外国人生徒は 30.9% であった。外国人生徒の国籍で最も多いのはポルトガルで 7.5%、次いでフランスが 5.7% である。一方で一般的中等教育の生徒数は 20,425 人、そのうちルクセンブルク人生徒は 4.0%、外国人生徒は 46.0% で、外国人生徒の割合が伝統的中等教育よりも 15% 近く高い。外国人生徒の国籍で最も多いのはポルトガルで 26.9% であり、一般的中等教育を受ける生徒の 4 分の 1 以上がポルトガル国籍を持っていることになる。また、生徒の第一言語については、ルクセンブルク語を第一言語とする生徒は全体の 29.7%、それ以外の言語は 70.3% となっている。ルクセンブルク語以外の言語で最も多いのはポルトガル語で 35.1% となっており、ルクセンブルク語を第一言語とする生徒よりもポルトガル語を第一言語とする生徒の方が多くことになる。それ以外の生徒はフランス語、ドイツ語、イタリア語、アラビア語等の言語を第一言語としている。中等教育の生徒の国籍や第一言語を見ると、伝統的中等教育と一般的中等教育ではその内訳に大きな違いがあることがわかる。

### 3.3. 教育現場で外国人児童・生徒が抱える課題

本節では、外国人児童・生徒が教育現場で抱える課題についてまとめる。田村建一 (2010)<sup>27)</sup> が指摘するように、ルクセンブルクの教育制度ではルクセンブルク語以外の言語を母語とする生徒たちにとって「言語」が大きな障壁になっている。生徒の第一言語の中でも特に割合の高いポルトガル語・フランス語・イタリア語・スペイン語はラテン語から派生したロマンス語系の言語であり、ゲルマン語系に属するルクセンブルク語とは言語の系統が異なり<sup>28)</sup>、このことが学習の遅れの原因になっていると考えられる。

学習への影響が出ていることを示す具体的な問題として、基礎教育における学習の遅れと中等教育への進学を挙げてまとめる<sup>29)</sup>。まず基礎教育における学習の遅れについて、課程の延長 (un allongement de cycle) と進級の遅れ (un retard scolaire) の 2 つの観点から検討する。ルクセンブルクでは次の



課程に進むために必要とされる能力を身につけられていないと判断された場合進級することができないことになっており、2021/2022年に初等教育に在籍していた生徒の中で課程の延長、つまり留年することになったのは全体の4.0%にあたる。第一言語別に見ると、ルクセンブルク語を第一言語とする生徒のうち留年した生徒は2.5%、フランス語は2.7%、ドイツ語は1.3%、ポルトガル語は7.0%、その他の言語は4.1%であり、このことから公用語以外の言語を母語とする生徒の留年率の高さがわかる。

次に進級の遅れについて、2021/2022年に初等教育に在籍していた生徒の中で1年以上超過してその学年に留まっている生徒は全体の20.8%にあたる。進級が遅れている生徒の中でルクセンブルク人生徒は39.5%、外国人生徒は60.5%となっており、進級が遅れている生徒の6割以上は外国人生徒である。また、進級が遅れている生徒の割合をルクセンブルク人生徒と外国人生徒で比較すると、ルクセンブルク人生徒が14.9%、外国人生徒が28.3%で、外国人生徒の割合はルクセンブルク人生徒の2倍近くになっている。その中でも特にポルトガル人生徒の割合が高く、全体の38.7%は進級が遅れていることになる。また、イタリア人生徒は20.8%、スペイン人生徒は16.7%の生徒の進級に遅れが出ており、これらはいずれもルクセンブルク人生徒の割合よりも高い。生徒の国籍と第一言語が必ずしも一致するとは限らないものの、ポルトガル語・イタリア語・スペイン語はいずれもロマンス語系の言語であり、ゲルマン語系の言語であるドイツ語が媒介言語・指導言語となっている初等教育では、同じくゲルマン語系であるルクセンブルク語を第一言語とする生徒にはない困難を抱えていると言える。

次に中等教育への進学についてまとめる。第2節でも述べたように、2021/2022年の一般的中等教育の外国人生徒の割合は伝統的中等教育より約15%高い。外国人生徒の国籍を国籍別に見ると、いずれもポルトガル人生徒が最も多いという点は共通しているものの、ポルトガル人生徒の割合は伝統的中等教育が24.3%、一般的中等教育が58.4%となっており、その割合には大きな差がある。伝統的中等教育は高等教育への進学を前提としている一方で、一般的中等教育は高等教育へ進学と就職の選択肢があり、基本的には伝統的中等教育の方がより高度な教育を受けられるとされている。このことを踏まえた上で、一般的中等教育の方が伝統的中等教育に比べて外国人生徒の割合が高いことを考えると、基礎教育の段階での言語に起因する学習の遅れが、外国人生徒の進路決定に大きく関わっていると考えられる。

このようにルクセンブルクの教育制度および学校での言語使用や言語教育は、ロマンス語系の言語を第一言語とする、もしくはロマンス語圏の国の国籍を持つ生徒にとって学習上の大きな困難となっていることがわかる。

### 3.4. 教育現場における言語による不平等を減らすための措置

第3節で述べたように、言語が外国人生徒にとって大きな障壁となっているが、ルクセンブルク政府も不平等をなくすための措置が必要であると考えており<sup>30)</sup>、外国人生徒を対象とした言語的な支援や、言語による不平等を是正するための措置が行われている<sup>31)</sup>。

基礎教育では、新しくルクセンブルクに移住してきた外国人生徒を対象とする受け入れコース (*cours d'accueil*) と、ポルトガル語を話す生徒を対象とするポルトガル語コースがある。国内に移住してきた子どもは年齢および学習段階に応じた教育課程に入るが、ルクセンブルクの学校で教育を受けるのに必要な言語能力がない場合一時的に受け入れコースを受講することになる。このコースでは日常的なコミュニケーションを取れるようになること、学校教育の授業についていけるようになることを目的とし、フランス語もしくはドイツ語またはその両方の授業と、ルクセンブルク語の入門の授業を受けることができる。また、ポルトガル語コースには補完的なポルトガル語の授業 (*cours complémentaires de langue portugaise*) と集中的なポルトガル語での授業 (*cours intégrés en langue portugaise*) がある。補完的なポルトガル語の授業は第一言語であるポルトガル語の学習を深めることにより教科学習および指導言語とポルトガル語を結びつけ、学校での学習を補助することを目指す。集中的なポルトガル語での授業は自然科学や人文科学の授業をポルトガル語で受け、学校で教えられる特定の分野について理解を深めることを目的としている。

中等教育では、ドイツ語が苦手な生徒を対象とした「外国語としてのドイツ語クラス (*classes ALLET : allemand langue étrangère*)」とフランス語が苦手な生徒を対象とした「フランス語補強クラス (*classes Français Plus*)」がある。これらは中等教育の1～3年目に設置されており、ドイツ語もしくはフランス語の能力の強化が行われる。また、フランス語での教育を希望する生徒を対象とした「媒介言語がフランス語のクラス (*LVF : classes à langue véhiculaire française*)」もある。4年目以降、指導言語がフランス語になる伝統的中等教育ではそのまま通常のクラスに合流し、一般的中等教育では4年目以降もドイツ語が指導言語のため、通常のクラスに戻るか「特殊言語体制

のクラス（RLS : Classes à régime linguistique spécifique）」に入ることになる。このクラスでは通常のプログラムと同じ授業をフランス語もしくは英語で受けることができ、卒業時には一般的な中等教育と同等の資格を取得できる。また、国が指定するプログラムとは異なる国際的な教育を受けることができる教育機関に通うという選択肢もある<sup>32)</sup>。以上のように言語という側面からの学習のサポートや国際的な教育の選択肢が存在し、言語に起因する不平等を減らすための措置がなされている。

ここまで述べたように、定住外国人および外国人労働者の増加によりルクセンブルクの言語状況は変化しており、言語に起因する課題も生じている。

近年国内では職場でのフランス語や英語の使用が拡大し、外国人の職場でのルクセンブルク語使用率が低下するなど言語状況が変化しており、今後もこのような状況が続くと考えられる。その中で、政府は公用語である3言語やポルトガル語・英語などの複数の言語が1つの社会の中に存在している国内の多様な言語状況を自国のアイデンティティの一部であると考えている一方で、ルクセンブルク語については唯一の「国語」として使用の拡大および振興を目指したいと考えており、ルクセンブルク語の標準化や教育の拡大など、ルクセンブルク語を使用および理解する人を増やそうという動きも活発になっている。

また、近年国内の外国人、特に労働年齢の外国人の増加が顕著であるということについても述べたが、仮にこの労働年齢の人々が退職後もルクセンブルクに定住し続け、2世、3世と国内に根付くことになった場合、ルクセンブルクの外国人人口の増加および文化的・言語的な多様化は今以上に進むと考えられる。その場合、第3章で述べたような教育現場における言語的な課題に直面する児童・生徒の数も増え、より大きな課題となる可能性があり、学習支援や不平等を減らすための措置をさらに強化していく必要がある。

論文内では詳しく触れることはできなかったが、2022年以降ロシアのウクライナ侵攻の影響でウクライナからの移民が増えており、その受け入れやそれによる外国人の増加についても検討の余地がある。侵攻の状況や移民の動向を予想することは難しいが、仮に移民が増加して生活することになった場合、そこでも言語的な問題が生じると考えられる。

最後に、今後も引き続きルクセンブルクの定住外国人や外国人人口は増加し、文化的・言語的な多様化が進み、その中で国内の外国人との媒介言語と

してフランス語の使用が拡大すると思われる。その一方で、唯一の国語でもあるルクセンブルク語は、政府の振興戦略によってドイツ語の方言ではなく1つの言語としての地位を固めていくことが予想される。また、3言語併用という言語状況自体がルクセンブルクのアイデンティティでもあるため、国内の定住外国人および外国人労働者の増加によって多様化が進む中で言語の使用場面やバランスが変化しながらも、3言語併用自体がなくなることはないと考えられる。

## 注

- 1) ルクセンブルク政府広報局出版部門(2015). 「ルクセンブルク大公国徹底解説」. pp. 2, 14-17.
- 2) 「ルクセンブルク大公国徹底解説」(2015), « à propos ... de l'histoire du Luxembourg » (2022), « à propos ... des langues au Luxembourg » (2022).
- 3) 「ルクセンブルク大公国徹底解説」(2015), « à propos ... de l'histoire du Luxembourg » (2022).
- 4) 1839年に独立後初の国勢調査が行われその後1970年までは不定期だったが、1981年から最新の2021年の調査までは10年に一度行われている。
- 5) « La démographie luxembourgeoise en chiffres » (2023), p. 7, Tableau 1.
- 6) « L'évolution de la population à travers les recensements » (2023), p. 2, Graphique 1, Tableau 2.
- 7) *Ibid.*, p. 5, Graphique 4.
- 8) « La démographie luxembourgeoise en chiffres » (2023), p. 7, Tableau 1.
- 9) *Ibid.* p. 13, Tableau 3.
- 10) « Une population de plus en plus cosmopolite » (2021), p. 2, Graphique 1.
- 11) « Panorama sur le monde du travail luxembourgeois à l'occasion du 1<sup>er</sup> Mai » (2023).
- 12) « Le Luxembourgeois reste la langue la plus utilisée à domicile » (2019).
- 13) 職場で2言語以上を使用する人は全体の4分の3以上おり、2言語以上を回答した人もいる。
- 14) *Ibid.*, p. 2, Graphique 3
- 15) « Regards sur les langues au travail » (2016), p. 1, Tableau 1.
- 16) « Une stratégie pour promouvoir la langue luxembourgeoise » (2017).
- 17) Commissaire ir d'Lëtzebuurger Sprooch (2022). « Aktiounsplang fir d'Lëtzebuurger Sprooch ».
- 18) Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2022), « Ensemble pour le luxembourgeois ! Le gouvernement adopte un nouveau plan d'action pour promouvoir la langue nationale ».
- 19) « Le système éducatif luxembourgeois - un aperçu » (2023), « Le système éducatif

ルクセンブルクにおける定住外国人および外国人労働者の増加による3公用語の使用状況の変化と教育上の課題

luxembourgeois » (2023).

- 20) 職業訓練：職業資格を得るために必要な教育が行われ、3つのコースからなる125種類の訓練が提供されている。
- 21) « Plan d'études / École fondamentale » (2011).
- 22) « Grilles horaires Enseignement secondaire classique » (2022), « Grilles horaires Enseignement secondaire général » (2022).
- 23) « Enseignement fondamental : Statistiques globales et analyse des résultats scolaires 2021/2022 » (2023), « Statistiques globales et analyse des résultats scolaires : enseignement secondaire classique 2021/2022 » (2023), « Statistiques globales et analyse des résultats scolaires : enseignement secondaire général2021/2022 » (2023).
- 24) 公立の教育機関に通う生徒 (54,273 人) からウクライナの移民の子ども (139 人) を除いた 54,134 人と、私立の教育機関の生徒 (6,221 人) のうち国の規定に準拠したプログラムを提供する学校に通う 103 人を合計した 54,237 人を対象とする。
- 25) これ以降、ルクセンブルク国籍を持つ生徒を「ルクセンブルク人生徒」、それ以外の外国籍を持つ生徒を「外国人生徒」とする。「ルクセンブルク人生徒」には、ルクセンブルク国籍に加え他の国籍を持つ生徒を含むこととする。
- 26) « Enseignement fondamental : Statistiques globales et analyse des résultats scolaires 2021/2022 » (2023) では第一言語について、「第一言語は生徒の家庭内で最もよく話されている言語と定義する。」(La première langue parlée est définie comme la langue plus parlée dans la cellule familiale de l'élève.) とされている。
- 27) 田村建一 (2010). 「ルクセンブルクの多言語教育と外国人児童生徒」. p. 29.
- 28) グランヴィル・プライス編 (2003). 『ヨーロッパ言語事典』, pp. 40, 293, 357, 425, 478, 531, 568-570.
- 29) « Enseignement fondamental : Statistiques globales et analyse des résultats scolaires 2021/2022 » (2023), « Statistiques globales et analyse des résultats scolaires : enseignement secondaire classique 2021/2022 » (2023), « Statistiques globales et analyse des résultats scolaires : enseignement secondaire général2021/2022 » (2023).
- 30) « Le système éducatif luxembourgeois » (2023). p. 9.
- 31) « Enseignement fondamental » (2023), « Enseignement secondaire » (2023).
- 32) « Le système éducatif luxembourgeois 2023 » (2023).

### 参考文献一覧

- Heinz, A. & Fehlen, F. (2016). « Regards sur les langues au travail ». STATEC.  
グランヴィル・プライス編 (2003). 『ヨーロッパ言語事典』, 松本克己監訳, 山本秀樹・佐々木冠・山田久就訳, 東洋書林.  
木戸紗織 (2008). 「ルクセンブルクの多言語社会に関する考察—欧州連合の「母語プラス二言語」政策の実践例として」, 『都市文化研究 Studies in Urban Cultures』(大

- 阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター), 10, 53-56.
- 木戸紗織 (2014). 「ルクセンブルクにおけるフランス語使用拡大の背景—外国人労働者の増加とルクセンブルク人の言語観—」, 『都市文化研究 Studies in Urban Cultures』 (大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター), 16, 15-27.
- Le gouvernement du Grand-Duché de Luxembourg (2017). « Une stratégie pour promouvoir la langue luxembourgeoise ».
- Le gouvernement du Grand-Duché de Luxembourg (2021). « Inscrire un enfant récemment arrivé au pays dans une classe de l'enseignement fondamental ».  
<https://guichet.public.lu/fr/citoyens/enseignement-formation/education-prescolaire-primaire/inscription/nouvelarrivant.html>. (最終閲覧日: 2023年12月13日)
- Le gouvernement du Grand-Duché de Luxembourg (2022). « Grilles horaires Enseignement secondaire classique ».
- Le gouvernement du Grand-Duché de Luxembourg (2022). « Grilles horaires Enseignement secondaire général ».
- ルクセンブルク政府広報局出版部門 (2015). 「ルクセンブルク大公国徹底解説」.
- Le portail des statistiques (2023). « Histoire et aperçu ».  
<https://statistiques.public.lu/fr/recensement/histoire-et-apercu.html>. (最終閲覧日: 2023年11月8日)
- Le portail des statistiques (2023). « Une population de plus en plus cosmopolite ».  
<https://statistiques.public.lu/fr/recensement/nationalites.html#:~:text=Une%20population%20de%20plus%20en,47.2%25%20de%20la%20population%20totale>. (最終閲覧日: 2023年11月17日)
- Marché du travail et éducation (SOC2) (2023). « Panorama sur le monde du travail luxembourgeois à l'occasion du 1<sup>er</sup> Mai », STATEC.
- Ministère de la Culture (2023). « Stratégie sur la promotion de la langue luxembourgeoise ».  
<https://mcult.gouvernement.lu/fr/dossiers.gouvernement+fr+dossiers+2018+langueluxembourgeoise.html#:~:text=Les%20mesures%20de%20promotion%20du%20gouvernement,-En%20vue%20de&text=renforcer%20l'importance%20de%20la,la%20culture%20en%20langue%20luxembourgeoise>. (最終閲覧日: 2023年11月24日)
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2022). « Ensemble pour le luxembourgeois ! Le gouvernement adopte un nouveau plan d'action pour promouvoir la langue nationale ».  
<https://men.public.lu/fr/actualites/communiqués-conference-presse/2022/12/14-luxembourgeois-plan-action.html>. (最終閲覧日: 2023年11月24日)
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2023). « Enseignement fondamental ».  
<https://men.public.lu/fr/systeme-educatif/scolarisation-eleves-etrangers/enseignement->

- ルクセンブルクにおける定住外国人および外国人労働者の増加による3公用語の使用状況の変化と教育上の課題  
fundamental.html. (最終閲覧日：2023年12月15日)
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2023). « Enseignement fondamental : Statistiques globales et analyse des résultats scolaires 2021/2022 ».
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2023). « Enseignement secondaire ».  
<https://men.public.lu/fr/systeme-educatif/scolarisation-eleves-etrangers/enseignement-secondaire.html>. (最終閲覧日：2023年12月15日)
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2023). « Priorités de la politique éducative ».  
<https://men.public.lu/fr/politique-educative/priorites.html>. (最終閲覧日：2023年12月13日)
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2023). « Statistiques globales et analyse des résultats scolaires : enseignement secondaire classique 2021/2022 ».
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2023). « Statistiques globales et analyse des résultats scolaires : enseignement secondaire général 2021/2022 ».
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2023). « Le système éducatif luxembourgeois 2023 ».
- Ministre de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse (2023). « Le système éducatif luxembourgeois - un aperçu ».
- Ministère de l'Éducation nationale et de la Formation professionnelle (2011). « Plan d'études / École fondamentale ».
- 小川敦 (2011). 「人口の変動と言語：ルクセンブルク・イデオロギーの視点からの基礎的研究」, 『ルクセンブルク学研究 = Studia Luxemburgensia』(ルクセンブルク語コイナー研究会), 2, 23-47.
- 小川敦 (2017). 「ルクセンブルクにおける移民の社会経済的不平等と教育制度」, 『言語文化共同研究プロジェクト 2016』(大阪大学大学院言語文化研究科), 15-24.
- Peltier, F. & Klein, Ch. (2021). « Une population de plus en plus cosmopolite », STATEC.
- Peltier, F. & Klein, Ch. (2023). « L'évolution de la population à travers les recensements », STATEC.
- Peltier, F. & Klein, Ch. (2023). « La démographie luxembourgeoise en chiffres », STATEC.
- Péporté, P. (2022). « à propos ... de l'histoire du Luxembourg », Le gouvernement luxembourgeois.
- Population et Logement (2023). « L'immigration au Luxembourg marquée par la guerre en Ukraine », STATEC.
- Reiff, P. & Neumayr, J. (2019). « Le luxembourgeois reste la langue la plus utilisée à domicile », STATEC.
- Service information et presse du gouvernement luxembourgeois (2022). « à propos ... des

langues au Luxembourg ».

Service information et presse du gouvernement luxembourgeois (2015). « Tout savoir sur le Grand-Duché de Luxembourg ».

田村建一 (2010). 「ルクセンブルクの多言語教育と外国人児童生徒」, 『ルクセンブルク学研究 = Studia Luxemburgensia』 (ルクセンブルク語コイネー研究会), 1, 21-45.